

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 六 第

卷 八 十 二 第

行發日一月六年四和昭

論 叢

戶數割の性質

法學博士 神戶 正雄

勞銀の理論

文學博士 高田 保馬

マルサスの恐慌論

經濟學士 谷口 吉彦

說 苑

近江商人の活躍について

經濟學士 菅野和太郎

兩圓との關係に就て

經濟學士 堀江 保藏

雜 錄

免償價值について

文學博士 高田 保馬

生産立地理論について

經濟學士 菊田 太郎

中央と地方の豫算形式

經濟學士 中川與之助

國民經濟と大都市經濟

經濟學士 大谷 政敬

大阪市の人口動態

經濟學士 武田長太郎

佛蘭西國營輸出信用保險

經濟學士 近藤 文二

法 令

救護法・農業調査令

附 錄

本誌第二十八卷總目錄

兩と圓との關係に就て

——明治八期間決算の圓價計算——

堀 江 保 藏

第一 緒 言

圓貨幣が流通を始めたのは、明治四年五月新貨條例制定以後の事である。それ以前に於ては、兩又は貫匁等を以て呼ばれし貨幣の流通せしこと、徳川時代と同様である。新貨條例制定の後と雖、直ちに新貨幣の流通が普く行はれたわけではなく、相當久しき 亘つて舊貨幣が依然として行はれて居た。

今明治財政史の第一頁を繙く時、先づ目につくのは明治八期間の決算書である。そこには歳入歳出各科目が整然と圓單位にて表示せられて居るのを見る。然るに上述の如く、明治初年に圓貨幣が行はれて居たわけではなく、又徳川時代同様に實物の收支も行はれて居たのであるから、必ずや舊貨幣及び實物による收支が、圓價に換算せられたものなることを氣付くであらう。事實、この決算書は數回の試みを経て、遂に明治十一年六月に至り編成の業を終へたものであつて、その編成に當るや、『委員勵精勉力し、各種の出納簿冊を彙集して之を調査精計するもの大凡二千

九百十餘冊、傍ら之に數倍せる各官廳の經費勘定帳に照合して、歲入出集計簿及び引用の帳簿百十七冊を製寫し、以て確實なる計數及び其事由を審定し¹⁾てなされたものである。

而て右の換算が如何にしてなされたかは、一々に就いて之を知るを得ないが、此の小論に於ては右換算の大體を考察し、併せて換算の基礎につき數言を要したいと思ふ。

第二 財政收支の圓價計算

一 實物收支

明治初年に於ても米の他に大豆・麥・菜種等の實物納が行はれて居た。けれども大豆其他の小物成は、三年七月廿四日の布告によつて、十月中旬に於ける近傍市街の上物の平均相場を以て定石代を上納すべき事が命ぜられて居り、又諸運上に至つては、既に徳川時代より主として貨幣を以て上納せられて居たのであるから、こゝでは暫く米のみを考へることとする。

米の收支が石數を以て會計帳簿に記入せられて居たのは明治八年末までである。この事は同年十二月の帳簿記入規則第二條に、『米穀は買上米及賣拂米を除くの他は、從來代價を附せず收支せり』²⁾とあるによつて明かである。地租條例が發布せられて、地租金納の制に改められたのは六年七月であるけれども、地租改正未了の地の租税はやはり米を以て納められたのであるから、八年末に於て尙ほ實物收支の行はれて居るのは敢て不思議ではない。

かゝる米穀收支が右の八期間決算書作製に際して圓に換算せられたる標準は、東京淺草廩米賣

1) 自明治元年一月至明治八年六月歳入歳出決算報告、附錄、2頁
 2) 大日本租稅志、中篇、955頁
 3) 明治財政史、卷四、846頁

値段の平均にとり、尙は各地の相場に照らして毎期の價格を定めたのである。蓋し地方々々の代價の據るに足るものなく、又此の如き計算は、『現出納平均の價值に比例して少差違なきを必し難きが如しと雖も、其入るものに附するに該價を以てし、又出るものに同價を以てするに由り、全般の計數は固より毫釐の差なきを保證するに足^り』るからである。今その標準米價を見するに壹石につき、

第一期	〔自明治三年十二月 至明治元年十二月〕	五・四二	第二期	〔自明治二年九月 至同 四年九月〕	七・四七六
第三期	〔自明治二年十月 至同 三年九月〕	七・四八八	第四期	〔自明治三年十月 至同 四年九月〕	四・六八二
第五期	〔自明治四年十月 至同 五年十二月〕	三・一七二	第六期	〔自明治六年一月 至同 年十二月〕	三・八六一
第七期	〔自明治七年一月 至同 年十二月〕	五・九一七	第八期	〔自明治八年一月 至同 年六月〕	五・三三六

である。然るに淺草の廩米が何時頃から圓價で賣拂はれたかは不明であるけれども、少くとも新貨發行以前は兩相場が建てられて居た事は明らかである。されば米の收支が上表の如く換算せられたからとて決して問題の解決とはならない。我々は進んで兩と圓との比價を吟味しなければならぬのである。

二 貨幣の收支

新貨條例制定と共に會計帳簿上にも大變化を來す事となつた。五年四月大藏省は諸帳簿改正の布達を出して、『諸帳の内、員數穀類は合限り、金は新貨の厘限り可致筈にひ得共、舊貨取交せ

通用中は毛限り、洋銀はセントを限可申、尤割掛算面の端數は四捨五入を以て可致計算事』、『雛形の内、金名目に記し有之分、並に壹圓以下の碎數等新貨名目に引直し難き分は、暫く從前の通り永名義相用ひ不苦事』⁵⁾と言ひ、又同年十一月の貨幣計算出納例則第一には『舊貨幣或は楮幣中、兩分朱等の稱呼之ある種類にて上納又は諸渡方の分共、總て新貨幣の數を以て計算、諸簿冊計表等へ記載すべし』⁶⁾、といへる通り、新貨條例制定以後は極く小部分を除き、すべて圓の稱呼を以て收入支出が行はれたのであるから、圓價計算が問題となるのはそれ以前の分に就てである。依つて次に當時の收支が如何様に就一されて居たかを一瞥しよう。

(イ)舊貨幣 舊貨幣とは圓稱呼の新貨に對するものであつて、或は兩分朱を以て呼び、或は幾貫文を以て呼び、その品位形狀に至つては種々雜多である。されば世上通用に當つては、總ての貨幣に通じて一定せる標準は無かつたけれども、明治元年十月には當時通用の二分判金（萬延元年より明治元年までの鑄造にかゝる）一兩を標準とする各種貨幣の價値を定め、同五月には所謂秤量貨幣にして取引上不便であつた丁銀豆板銀の通用を停止し、その結果同年八月從來此等の銀貨幣を以て納めて居た貢米代その他運上 everything を金計算に改め、金一兩につき錢は永一貫文、銀は六十匁と定めて居るのを見ても、當時政府が兩を以て通貨の統一を計らんと努力せし事を容易に知り得る。財政上無論各種貨幣の收納が行はれて居るが、これを兩を以て統一し、兩を以て計算單位とせる事は右の事情よりも推して知るべく、更に諸くの帳簿又は傳票の雛形を見るに、すべて『金何兩』と記せる所よりしてもこの推察の正常なるを思はしむるものがある。この推察にして

5) 憲法類編、第七冊、30丁

6) 同上、36丁

7) 明治財政史、卷十一、318頁

8) 大日本貨幣史、三貨部、458頁。大日本租稅志中篇、953頁

誤りなくば、各種舊貨幣に就ての兩價計算及び圓價計算は最早問題でなくなり、實物收支の場合と同様、兩と圓との關係如何が問題として残る事となるのである。

(ロ) 洋銀 維新前に於ける税關の諸收納には概ね一分銀が用ひられたが、洋銀その他の外國貨幣も安政の條約によつて收納せらるゝ事となり、一分銀に對する割合はその百個に對して洋銀三百十一個を以てせられた。⁹⁾ 明治元年二月には改めて洋銀の内國通用を許し、従つて又貿易關係以外に一般に租税として收納せらるゝに至つた。その收支に當つてドル、セントの稱呼がそのまゝ用ひられたが、或は兩貨幣に換算せられたかは明かに知るを得ないが、前述の諸帳簿改正に關する布達より察すれば恐らく兩者併用せられたものであらう。五年以後洋銀が圓價を以て計上せられた事は、前述の貨幣計算出納例則及び八年十二月の帳簿記入規則¹⁰⁾によりて明かである。依つてこゝに問題として残るのは、ドル、セントが如何に圓に換算せられたか、及び若し既に兩に換算せられて居たとすれば更に圓に換算せられた比率如何といふ事である。

(ハ) 政府紙幣 明治政府は維新當時の莫大なる支出に充つべき收入をあらゆる方面に求めたが、その最も効果ありしは太政官札(金札)の發行である。元年四月より二年七月に亘つて合計四千八百萬兩の巨額が發行せられ、その流通を圓滑ならしめんがため、政府は金札を以て公納に充つべき事をも奨励した。後この金札に對する補助貨として三年九月に發行せられた民部省札も同様に兩分朱を以て呼ばれ、同じ政府紙幣である大藏省證券、開拓使兌換證券及び新紙幣が圓を以て呼ばれたのに對して興味ある差違を有する。

9) 明治財政史、卷七、155頁

10) 同上、卷四、845頁參照

初め政府は、財政目的と金札普及の目的とを以て諸藩に石高割貸付を命じた。これ諸藩にその石高に應じて資金を融通する方法であつて、正金による償還及び利子の収入を目的とし、諸藩の財政救済よりも寧ろ政府の財政補給が主要目的であつた。けれども人皆金札に慣れず、又政府の信用も未だ鞏固ならざりしため、流通困難を極め、その最も圓滑なりと稱せらるゝ東京大阪京都の三都に於ても百兩僅かに正金四十兩の價值しか持たないといふ有様であつた。こゝに於て政府は、元年六月正金との間に差を立つる事を禁じ、九月には租税及び諸上納に一切金札を用ふべき事を命じ、以て金札價值の回復を計つたけれどもその效なく、依然として正金に對して二割強の打歩が附せられた。政府も已むを得ず十二月四日に至つて紙幣相場を認め、同二十二日には諸上納の中金納の分は暫く紙幣百二十兩を以て正金百兩に充つべき旨命じた。二年二月に至り、幣制改革の目的を以て太政官中に造幣局を設置すると同時に東京に於ける金銀座を廢止し、次で地金銀を得るために斷然正金の支出を停止し、紙幣を以て百般の支拂に充當し、官吏の俸給諸物品の代價等總て、一ヶ月中十日間の紙幣平均相場を以て之を支拂ふ事とした。従つて紙幣の世上に流布するもの益々多く、經濟界の混亂愈々甚しくなつたけれども、四月二十九日にいたり、金札の通用年限を改定し、新貨との兌換を豫約して金札相場を廢し、五月四日には額面價格を以て諸税の上納に充てしめ、又發行高を制限したので、漸く金札流通の道は開け、従つて正金との開きも減少し、遂には反對に正金に打歩の附せらるゝをさへ見るに至つた。¹¹⁾

右の如く太政官札は、明治初年の財政上要重なる收支手段であつた。一時二十兩の打歩を附し

11) 貨政考要中篇(政府紙幣事歴)、13頁以下、大隈侯八十五年史、卷一、238頁以下、參照

て上納せられ、時の相場に依つて支出せられて居た間は、兩貨幣に換算して計上せられて居たが、その他は額面價格通り兩貨幣と同様に收支せられた。何れにしても更に圓價に換算せらるゝに當つて問題となるのは兩と圓との關係である。

けれどもこれに就てはその對當であつた事、即ち一兩が一圓の割合を以て計算せられてゐる事を、明かに八期間決算書に窺ふ事が出来る。即ち第二期二四、〇三七、三八九・八一三及び、第二期三三、九六六・六一〇・一八七、合計四千八百萬圓は、太政官札發行高四千八百萬兩を數字はそのまゝに、稱呼のみ改めて計上せられたものである。更にこの事を明かに示すものは、五年三月より十二年十月に至る間に行はれた金札の整理表である。「明治財政史」¹²⁾によれば、

太政官札發行高

拾兩札	二〇、三三二、八九〇兩
五兩札	五、九六九、六八五兩
壹兩札	一五、四八五、七九八兩
壹分札	五、一六一、二九六兩一分
壹朱札	一、〇五〇、三三〇兩三分
計	四八、〇〇〇、〇〇〇兩
同整理高	

四五、六六一、五九五・九三一^円

二、〇五二、七四四・一二五

新紙幣と交換高

金札引換公債證券と交換高

説苑 兩と圓との關係に就て

第二十八卷

八八一

第六號

八一

一、五九八・一九四^四

拙改手入等有之引揚切高

二八四、〇六一・七五〇

散 失 高

計

四八、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇

とせられてこゝにも同様の事が行はれて居り、民部省札も同様に整理せられて居るのを見る。これは勿論、新貨條例と同時に發布せられた一兩を一圓に充つべしとの布告に據つたものであらうが、その詳細は第三節に述べる事とする。

尙明治初年に發行せられた政府紙幣には、大藏省證券その他三種類あるけれども、皆圓の稱呼を以て發行せられてゐるから、こゝには問題とならない。

(二) 藩札 これは諸藩がその財政上の目的を以て發行せる、領内限り通用能力ある不換紙幣である。その起原については明がでないが、廢藩置縣の當時には二百四十余藩、十四縣、九旗下領に及び、その種類も金札銀札を首め、米札・錢札・永札・傘札・總絲札・轆轤札等頗る多様となり、價值に於ては反古紙に等しきものさへあるに至つた。明治政府はこれら藩札の整理を以て幣制統一の急務となし、二年二月にはその増發行を嚴禁し、四年七月十四日廢藩置縣の舉あるや斷然その廢止を決行した。即ち同日の相場を以て新紙幣と交換する事を命じ、同時に同じ相場を以て租税上納にのみ用ふる事を許し¹⁸⁾、以て極力その引揚げに努めたのである。故に藩札が政府の財政上にその地位を占むるに至つたのは、大部分全國政令一途に出たる四年七月十四日に始まる。而て全然廢止せらるべきものであるから、支出手段としては全く用ひられなかつたのである。右の引換

18) 憲法類編、第九、52丁

及び上納の標準となつた相場は如何なる稱呼で建てられたか。五年二月十三日の大藏省布達に示せる上納證書の雛形によれば、¹⁴⁾

證

一金何萬何千兩也

此紙幣何萬何千兩 但辛未七月十四日相場金壹兩につき紙幣何程

此札何十何萬枚 包數幾つ

..... (紙幣とは藩札を指す——筆者)

とある通り、兩が標準とせられて居るのである。即ち、一旦當時の通貨に改められ、更に新貨に換算せられたのであつて、こゝにも兩と圓との關係が最後の問題として残る事となつたのである。

第三 兩と圓との關係

以上に於て、財政收支の圓價計算に當り、兩と圓及びドルと圓との比價を問題として殘し、政府紙幣の項に於て兩と圓とが一對一の割合を以て換算せられた事に稍々觸れ、而てその根據を四年五月十日に布告せられた新貨例目第四『新貨幣と在來通用貨幣との價格は、一圓を一兩即ち永一貫文に充つべし。故に五十錢は二分即ち永五百文云々』¹⁵⁾に求めた。この兩圓對當は名目價值に就てであつて、材料價值が兩と圓とに於て全く等しかつたから便宜上稱呼が改められたといふわけ

14) 同上、54丁

15) 大日本貨幣史、三貨部、492頁

ではない。一兩を一圓に當つべしとの法令が強制せられて實行を見たのである。けれども名目價值による貨幣の通用に慣れず、況んや幣制の極度に紊亂せる明治初年にあつては、必ずや兩と圓とが材料價值に於て少くとも相接近せるに非ずんば、一片の布告を以てしてはその實行には多大の障礙があつた事と思はれる。

初め幣制改革の事が議せらるゝや、稱呼並に形狀は元のまゝとし只實質のみを改めんとしたが、一部識者の建議に依つて圓稱呼の銀貨本位説と變じ、轉じて金貨本位説となつて漸く採用せられたのであつて、此等の議に於て材料價值の標準となつたものは、外國との取引に於て最も多く用ひられて居た洋銀である。されば我が國明治初頭の幣制改革に偶々貢獻する事となつた洋銀は當時の我が通貨との間にも密接な關係があり、而てこの洋銀の仲介によつて兩が圓に改められたのではないかと考へるのを至當とする。依つて以下この事を述べようと思ふ。

一 兩と弗との關係

徳川時代は米遣ひの經濟時代と稱せらるゝが、一面に於て貨幣の普及は時代の降ると共にその範圍益々廣大となり、財政上の收納に米を主とせる幕府は、諸般の費用を支出するのに一旦貨幣に換へる事を要したるため、米作の豊凶如何を問はず、財政の窮乏に苦しんだのである。その救済策として御用金の賦課、拜借金拜借米による利子收入等種々の手段が用ひられたが、その最も注目すべきを貨幣の改鑄なりとする。これ貨幣の品位を低下する事により出目を得て以て財政の不足を填補せんとするものであつて元祿年間以後屢々行はれ、正徳享保兩回の改革によつて一時

その弊害を救済するところありしも、趨勢止むるを得ず、元祿以前の通貨たる慶長金一兩が新貨に換算して拾圓餘なるに對して、明治初年に鑄造せられたる二分判金は一兩の實價約壹圓八錢となり、百七十餘年の間に實に十分の九の品位切下が行はれたのである。

安政五年の通商條約に依つて、各外國貨幣は日本貨幣と其の同種の同量を以て互ひに通用すべき事を許され（品位に關する規定なし）、外國貨幣中最も多く行はれたる洋銀（メキシカン、ガラ）が銀貨幣であつた爲め、我が一分銀が比價の對象となり、その三百十一個と一弗洋銀百個とが對當とせられた。而も此の比價を定めた手續は甚だ簡單で、米國公使ハリスが無難作に秤の一方に洋銀百個を入れ、更にそれに鈎合ふ様に他の一方に我が一分銀を入れたところが、三百十一個載つたので、之を定めて不變の標準としたといふ事である。¹⁶⁾當時の一分銀（天保一分判銀別稱古壹分銀）は洋銀に比して品位高かりし爲め、之と交換して盛んに海外に持去られ、又我國は歐米と金銀の比價を異にせし爲め、金貨も亦銀貨と交換して續々流出する事となつた。幕府はこの狀況を見て之を制止せんとし、安政六年には新たに壹分銀（安政壹分判銀別稱新壹分銀）、萬延元年には貳分判金貳朱判金を夫と鑄造し、品位を劣惡ならしめて以てその對策とした。けれども著しき効果を擧げる事は出來ず、特に壹分銀について然りしものの如くである。即ち香港等に於て鑄造せる一分銀との交換及び貿易の決濟等のために、内地市場に拂底するまでに流出を續けたのである。「大隈侯八十五年史」によれば、慶應末年には洋銀一個は一分銀二個にしか換へられぬ程その市價騰貴したといふ事である。¹⁷⁾而て萬延以後鑄造せられたる二分判金は、品位劣惡なりした

16) 大隈侯八十五年史、卷一、182頁

17) 同上、183頁

め、安政條約による交換割合、即ち洋銀二個對二分判金三個を以てすれば、外商は多大の損失を蒙る事となるので、安政二分判金に對するが如き持出し方法を講じなかつたものの如く、從つて二分判金は内地市場に最も多く行はるゝ事となつた。¹⁸⁾

右の他、明治政府はその初めに當つて、財政の必要上萬延二分判金と殆ど同質の二分判金を鑄造した。地金を得るために、貿易で得た洋銀を以て清國の標金を買つたといふ事であつて、その鑄造高は百七十萬兩に及んで居る。加ふるに二分判金は已に幕末時代より諸藩に於て盛んに贋造が行はれた。蓋し幕末に及んでは、唯さへ諸藩は財政疲弊の極に達して居たところへ、鎖國壞夷の論が勃興し、國防の必要上已むなく戰艦を備へ銃砲を求め、又鳥羽伏見の戰爭以來、全國は暫く硝煙彈雨の巷と化し、大小藩悉く兵を動かさぬものはなかつたので、贋貨を鑄造して一時の急を救つたものが甚だ多かつたのである。¹⁹⁾この事は當時二分判金が最も多く行はれて居た事を物語るものであらう。

右の如く、二分判金は内國通貨の標準であつた。その贋造の行はるゝや自然外國人の手に入つたものも多く、こゝに贋造二分判金交換の問題を生じ、洋銀と二分判金との比價、從つて金銀比價の問題が強く政府當路者を悩ます事となつたのである。金銀比價の相違は我國に不利なるのみならず、惡貨贋貨の流通による幣制の混亂は、一方外國貿易の不振を來し、他方内國流通を阻害して經濟上に及ぼす影響は少くなかつた。就中これ入手せる外國人より苦情を訴へられたる諸外國公使は、口を極めて我が國の幣制を非難しその改革を強要したので、政府は内外多端國費窮

18) 貨政考要、中編(政府紙幣事歴)、16頁

19) 山利公正傳、212頁

20) 大饑侯八十五年史、卷一、334頁

乏の際なるにも拘らず、特に幣制改革に意を用ひ、先づ京都金座中に貨幣分析所を設けて内外貨幣の分析に當らしめたのである。

この結果貨幣の材料價值は明白となり、又歐米に於ける金銀の比價を知る事によつて、二分判金二個即ち一兩が略々洋銀一ドルに對當する事が認められた事と思はれる。而て政府は、二年七月二十一日には二分金貨交換方案を示して外國人所有の二分判金二百個と洋銀百ドルとを交換せん事を各國公使に提議し、三年十月には貨幣交換の事を各國公使に報告して『一分銀は三百十一個即ち七十七兩三分、並に二分金貨二百個即ち一百兩は共に料塊と見做し、その價格は凡そ一百「ドルラル」に充つべく云々』²¹⁾といひ、新貨條例制定と共に右の比率を決定して居る。こゝに於て二分金貨を所持する外國人はその値下りによる不利益を蒙る事となり、且又外國よりの輸出貿易に不振を來す事となるを以て、外國公使は外務省に抗議して來たけれども我が國は斷然之れを斥けた。即ち四年七月の外務省當局と各國公使との會見の一節に、『彼曰ふ、二分金貨は墨西哥銀貨半「ドルラル」に對當せず、我曰ふ、是れ分析をなすの精密ならざるに由るのみ、其の半「ドルラル」に對當するや明かなり、即ち清國香港其の他の各地に於て分析をなせしものは大抵半「ドルラル」に對當せり』²²⁾とある。而て外國公使も遂にこれを承認して、是に二分判金一兩と洋銀一ドルとの對當が認められた。

實際開港場に於ける税金が、この割合で二分判金を以て收納せらるゝ事となつたのは、四年十一月以後の事であつて、その布達によれば洋銀百個に對し二分判金二百二個（この個數は新壹圓

21) 明治財政史、卷十一、370頁

22) 大藏省沿革志、造幣寮第一、47丁

23) 同上、100丁

金貨についても同じ）となつて居る²⁴⁾ この時に於ても一分銀はやはり三百十一個の割合とせられて居るから、銀貨に就ては一ドルと三分餘とが對當である様であるが、之れは我が國金銀比貨の正當ならざりしに依るのであつて、この誤りを矯正すれば三分餘の實價は四分即ち一兩となるのである²⁵⁾

以上を約言すれば、明治初年の標準通貨は萬延以後明治へかけて鑄造せられたる二分判金であつて、その一兩の實價は略々洋銀一ドルの實價と等しかつたのである。

二 圓と弗との關係

明治二年十一月幣制改革の議決するや、その本位として豫定せられたのは、量目七匁二分二厘五九二より減する事なき、品位十分の九の銀貨にして、洋銀と全然同一のものであつた²⁶⁾ この豫定は、當時視察のため米國に在りし伊藤大藏少輔（博文）の建議に基き、各國公使並に造幣顧問の外人等の反對意見ありしにも拘らず、金本位制を採る事に變更せられた。本位金貨中原位となれる壹圓金貨は一・五グラム即ち四分の純分を有し、材料價值に於ては當初豫定せられたる壹圓銀よりも稍々劣つて居た。而て外國貿易に於ては尙ほ銀貨を以て多く取引せられしため、政府はその便宜のために別に貿易にのみ用ふる壹圓銀貨を鑄造して洋銀と品量を同一ならしめ、以てこの壹圓銀及び洋銀百個と本位金貨百壹圓とを對當とした。この壹圓銀が禍ひしてその後金の濫出を招致した事は周知の事柄である。

右によつて明かなる如く、政府は幣制改革に際してあくまで外國關係を顧慮し、本位貨幣の量

24) 明治財政史、卷七、158頁

25) 本稿末尾の参考表参照

26) 明治財政史、卷十一、326頁

目品位すべて外國貨幣を標準とし、金本位制を決定するに及んで、メトリック、システムに規定せられて品位稍々落ちたりと雖も、尙ほ略々壹圓と一ドルとの對當を保持せんとして居るのである。これ全く在來の我が貨幣に準據するに足るべきものなく、外國より迫られ、その要求に應じて企てられた幣制の改革であつた事に起因する。即ち圓貨の制定は全く他律的であつたといはなければならぬ。

三 兩と圓との關係

以上一項二項に於て、當時通用の標準であつた二分判金の材料價值が洋銀に接近せる事、及び幣利改革が洋銀を基準として行はれた事を略述した。これに依つて兩と圓との對當關係は略々明かになつたと思ふが、尙ほ繰返してこの事を述べて見よう。

上述の如く明治初頭の幣制改革は全く他律的であつた。然らば我が國本來の貨幣に一顧も與へられなかつたかといふにさうは考られない。幣制改革實行に當つて、參與大隈八太郎(重信)及び造幣判事久世治作の建議に基き、方形を廢して圓形となす事、及び四進法を廢して十進法となす事が決定せられたのは二年三月である。この形狀價名よりも更に樞要なる問題は、其の品位及び金銀比價並にその種類の定め方であつて、特に品位に就いては我が國在來の不統一に懲り、外國貨幣の統一ある事に鑑み、百方研究を重ね、遂に同年十一月に及んで其の議を決し諸外國公使に通告する運びとなつたのである。²⁷⁾

その決議要領を見るに、全く新種の貨幣を發行し、その本位となるものは墨西哥銀と同品位で

ある事の他、在來の兩貨幣との關係につき何ら記載せらるゝ所がない。けれども當時既に精密なる分析も行はれて居たから、當時の金銀比價に基いて我が二分判金二枚即ち一兩が略々洋銀一ドルに對當する事が判明して居た事と思はれる。依つて洋銀と品位全く同じき一圓銀を鑄造すれば、在來の一分銀四枚の一兩には對當しないけれども、當時の通貨中最も多く行はれて居た二分判金二枚の一兩には略々對當して、兩の稱呼を直ちに圓に改むるも、流通界に大なる波紋を起さず済まし得る事が期せられたのである。

即ち徳川幕府の手に依つて屢々貨幣の改鑄が行はれたる結果、その最後に鑄造せられたる二分判金一兩は、偶々洋銀一ドルと略々同一の實價を有する事となり、この洋銀を媒介として兩より圓に甚だ都合よく改められる事となつたのである。試みに二分判金と新壹圓金貨とを比較すれば

二分判金百兩

日方百六十匁内

〔金三十五匁二
銀百二十四匁八〕

〔銀一金十六の比に換算すれば七匁八〕

金四三匁

金貨百圓

純分日方四〇匁

であつて、當時純金一匁の價二圓五十錢であるから、二分判一兩は一圓に對して約七錢五厘方高價なるが如きも、當時我が國貨幣の品位は不齊一であつた事より見れば、すべての二分判金がこの品位を保つて居たとは稱し難い²⁸⁾。けれども大體に於てその材料價值は甚だ圓に接近して居たため、幣制改革は他律的であつたにも拘らず、我が國幣制の自然の推移に合致し得たのである。

第四 結

語

明治初年の幣制改革の方針は、常に混沌たる當時の貨幣制度中にも含まれて居た我國一定の慣習に従はなければならぬばかりでなく、外國貿易の必要上延いては内地通用まで許すの已むを得ない事となつた外國貨幣とも歩調を合さねばならなかつた。而も我が國の舊貨幣には準據するに足るものなく、兩分朱の四進法に至つては甚だ時代に適合しないものであつたから、その範を洋銀に定める事となつたのである。偶々標準通貨であつた二分判金一兩と洋銀一ドルとは材料價值に於て略々同一であつたため、範を洋銀にとり一兩を直ちに一圓に通用すべき事を命じて、通貨のより以上の混亂を招致する事なく、却つて所期の目的に到達する事が出来たのである。繰返して述ぶる如く、名目價值による貨幣の通用に慣れず且つ幣制の甚だしく紊亂せる時に於ては、品質に著しき差異ある圓貨幣を鑄造して、一兩を一圓に充つべき事を命ずるもその行はれざるや明かであるが、幸ひにも兩とドルとが對當の關係にあつたといふ事は、上述の二重の目的到達を任務とせるこの幣制改革のために誠に好都合であつたといはねばならない。四年五月十日に布告せられた新貨例目の基礎はこゝにあるのであり、従つて兩稱呼の太政官札、民部省札が圓稱呼の新紙幣と同一の數字を以て交換せられた事も根本はこゝにあるのである。

従つて、最初に問題として残した決算書の圓價計算も、二分金貨その他で收支せられた材料價值が圓に換算せられたのではなく、一兩を一圓、一分を廿五錢といふが如く名目價值によつたものと見るべきである。『入るものに附するに該價を以てし、又出るものに附するに同價を以てするにより』、全般の計數には殆ど影響なきは見易き所であり、又貨幣の材料價值の計算は品質同

一ならざる結果誤りを生じ易きのみならず、紙幣にて收支せるものとの關係に於ても、名目價值による計算が妥當であるからである。

而てドル、セントを以て記入せられて居た分も、一ドル一圓の當りを以て換算せられたであらう事も、誤まつた推察ではあるまい。

その後明治政府は、四年五月の造幣規則によつて舊貨幣の改鑄法を定め、古金銀預り證券の發行及び爲替會社による買收等によつて民間にある舊貨幣の引揚を策し、これによつて四年六月より六年十二月迄に發行せる新貨は、金貨四六、七一二、〇〇〇圓餘、銀貨一一、三三〇、〇〇〇圓餘、合計五八、〇一三、〇〇〇圓餘となつたので、舊貨幣の通用停止を劃し、七年九月「舊金銀貨幣價格表」を作製公布して新貨との交換を開始し、こゝに明治初期の幣制統一は一段落を告ぐる事となつた。

唯、公納のみには明治卅二年八月八日まで舊貨幣を用ふる事が許された²⁹⁾けれどもこの場合には、上記の價格表に照らして受入れられた事と思ふのである。

參考表

本表は、大日本貨幣史・日本貨幣史(松本豊次郎氏著)・舊金銀貨幣價格表等を参照作製せるものである。

名 稱	鑄造期間	通用期間	多数量による一個の品量	新貨による一個の價格	鑄造高
安政貳分銅金	自安政三年六月 至萬延元年	自安政三年六月 至慶應三年六月	量日 一・五 ²⁹⁾ 金(千兩) 二〇三・〇 銀(同) 七九四・四 雜(同) 二六	一五・三 ³⁰⁾	三・五一、二〇〇 ³⁰⁾

29) 貨政考要、上編(正貨事歴)、126頁

30) 明治財政史、卷十一、400頁

萬延式分判金 別稱新二分判	自萬延元年四月 至明治二年四月	自萬延元年四月 至明治七年九月	0・4	三六・三	七八・〇	二・八	五四・三	五、〇〇、七五
貨幣司次 貳分判金	自明治元年二月 至明治二年二月	自明治元年九月 至明治七年九月	0・八	三三・四	七四・〇	二・六	同 右	一、三三、三九
同上 壹位貳分判金	自明治元年九月 至同	自明治七年九月 至明治七年九月	0・八	—	—	—	同 右	六六、〇〇〇
天保壹分判銀 別稱古壹分銀	自天保八年十二月 至安政元年十二月	自天保八年十二月 至明治七年九月	二・三	二・一	九八・六	九・三	三四・七	一九、七五、一〇〇
安政壹分判銀 別稱新壹分銀	自安政六年八月 至明治元年八月	自安政六年九月 至明治七年九月	二・三	〇・六	八六・五	二〇・九	三・七	二八、四〇、九〇〇
貨幣司次 壹分判銀	自明治元年二月 至明治二年二月	自明治七年九月 至明治七年九月	二・三	〇・五	八六・六	二五・五	?	一、〇六、六五五
洋銀	—	自安政五年 新貨鑄造後消失年	七・四	—	九〇・〇	一〇〇・〇	一〇一・〇〇	—
壹圓金貨	自明治四年 至明治十三年	自明治四年 (現行通貨)	〇・三	二〇〇・〇	—	一〇〇・〇	一〇〇・〇〇	二、〇八一、六六四